

11 クリオプレシピテートを使用した消化管出血症例の臨床的特徴

1) 東京都立墨東病院 輸血科 2) 東京都立墨東病院 救命センター

○ 藤田 浩¹⁾, 西村 滋子¹⁾, 杉山 和宏²⁾, 田邊 孝大²⁾,
山岸 利暢²⁾, 湯川 高寛²⁾, 宮崎 紀樹²⁾, 中村 一葉²⁾,
石田 琢人²⁾, 清水 洋²⁾

【目的】クリオプレシピテート(クリオ)はフィブリノーゲンfbnが濃縮されている。fbn値100mg/dL以下、100~150mg/dLで、低下が予想される出血に使用する運用である。今回、消化管出血に対するクリオの使用症例の臨床的特徴を調査し、報告する。

【方法】2014年12月~17年7月までにクリオを使用した消化管出血症例を輸血システムから抽出。検討項目は、診療科、基礎疾患、年齢、性別、バイタルサイン、血液検査結果、Glasgow Blatchford score (GBS)、輸血量、予後。

【結果】クリオ使用例は10例(中央値68才、男/女:7/3)で、すべて救命センター、下部消化管出血はなく、静脈瘤破裂5例、胃十二指腸動脈瘤破裂3例、胃潰瘍1例、十二指腸潰瘍1例。心停止蘇生3例を含むショック例(SI:1.6±0.2)で、GBS:14±1。使用前・使用後fib(mg/dL)はそれぞれ127±15、172±13。24時間使用RBC:18±3U、FFP:13±3U、PC:15±2U、24時間死亡は0例。

【総括】クリオを使用した消化管出血は、出血性ショックを伴う静脈瘤・動脈瘤破裂によるものが多く、大量輸血症例であった。

※ 雑誌掲載イメージです。実際の雑誌掲載とは若干異なりますのでご了承ください。